

琉球八重山白保方言のアクセント体系は三型であって、二型ではない

中川奈津子, セリック・ケナン

本発表では、沖縄県石垣市白保で話されている南琉球八重山白保方言のアクセント体系に関する新たな発見を報告する。先行研究では、白保方言と最も近い系統関係にある波照間方言のアクセント体系は3型（平板型、下降型、上昇型）であるが、白保方言は2型（平板型と下降型）であり、波照間方言の上昇型と下降型にあたる語彙が白保方言では下降型に合流したとされてきた（琉球方言研究クラブ（2007）『石垣白保方言の音韻体系とリズム=アクセント的構造』（沖縄：琉球方言研究クラブ）；中川ほか（2015）「琉球八重山語白保方言の音韻」（狩俣繁久（編）『琉球諸語記述文法』I巻，沖縄：琉球大学）；麻生・小川（2016）「南琉球八重山波照間方言の三型アクセント」（『言語研究』150)）。しかし、発表者らが現地調査を経て白保方言の3人の話者（男性A，1933年生；男性B，1932年生；女性C，1936年生）に行った語彙を録音・分析した結果、従来下降型とされてきた語彙は、2種類に分かれることが判明した。白保方言において下降型とされてきた語彙は確かに全体的にF0の下降が見られるものの、波照間方言の下降型にあたる語彙(Fa1)と上昇型にあたる語彙(Fa2)の下降は特徴が異なり、Fa1の語彙は大幅な下降を伴うのに対して、Fa2の語彙は小幅な下降を伴うことがわかった。上述の観察を確かめるため、Praatを用いた音響分析を行った。Fa1とFa2では下降の幅が異なるという仮説の下で、語全体のF0ピークと語末80 msecの平均F0をそれぞれの語に関して計測した。その結果、Fa1とFa2における、F0ピークと語末の80 msecのF0の差は、Fa1の方がFa2より大きいことが明らかになった。さらに、同じ語彙に対して、男性Bと女性Cから助詞付き例文（主格の=nuまたは奪格の=gara）も録音・分析し、助詞付きでも同様のパターンを保持していることがわかった。この結果から、白保方言は波照間方言と同様に3型であり、波照間方言の下降型に対して白保方言の大幅な下降型(Fa1)、波照間の上昇型に対して白保の小幅な下降型(Fa2)が対応していると発表者らは結論づけた。